

# 学校現場での継続的なルーブリック作成の取り組み

## Efforts to Create Rubrics Continuously at School

キーワード：ルーブリック，授業力，中学校，学習評価

Keywords: tRubric , Quality of lessons ,Junior high school , assesment

石出 勉

ISHIDE Tsutomu

### Abstract

In order to respond to new learning assessment based on the new course of study, it is essential to practice assessment methods such as performance assessment. Therefore, we practiced making weekly rubrics in all subjects and grades throughout the year at the junior high school site.

Rubrics were made throughout the year and I concluded the following 3 points. (1) It was easy to imagine the lesson development because of the instruction content for the next week, and we were able to create it in a short time. (2) The characteristics of each stage were in the description of the behavior assessment. (3) Especially for new teachers who are in the third year of teaching or less, the creation of rubrics affects the quality of their lessons.

## 1 はじめに

団塊の世代が大量退職をした後、初等中等教育の現場には大量の新人教員が採用された。新卒だけでなく社会人経験者も積極的に採用する都道府県も多い(文部科学省2018)。社会人経験者の採用は、とかく狭くなりがちな教員の世界に新しい視点を入れてくれることを期待するものであり、生徒指導の場面においては、これまでの経験は様々な面で活かしていったほしいところである。しかしながら、授業力の点でいえば、初めての教壇であり、新卒者同様、即戦力にはなりえない。東京都教育施策大綱(2017)の「重要

事項Ⅷ方針1」に『子供たちに新たな時代に対応できる力を育むために、教員の資質・能力の向上を図る取組を推進します。』とあるように、教員の資質・能力の向上を図ることは喫緊の課題である。

一方、指導と評価の一体化が求められる中、主体的・対話的で深い学びの評価を適切に行うことは重要である。単なる知識の再生の評価を超え、学習者のパフォーマンスを適切に評価することのできる教員の育成が急務である。教員がこれまでの評価観を拡張し、パフォーマンス評価の手法を身につけ、適切な学習評価をすることが強く求められている。

このような状況の中、筆者は令和2年3月まで、公

立中学校の校長の立場で、カリキュラムマネジメントを推進し、教員の授業改善を進めながら、当該校の教員達とともに研鑽を重ねてきた。この実践の経過で、一斉指導による知識や技能の伝達の授業から脱却し、生徒の活動を取り入れた授業も増えてきた。

しかし一方で、どのような視点でこの活動を評価に結びつければ良いのかに悩む教員も少なからずいた。そこで、評価の視点を整理し、授業力の向上を目指して、全ての教科、単元・題材において1年間をかけてルーブリックを作成し、授業に臨んだ。本研究では、このとき作成されたルーブリックを分析する。また、授業を観察し、授業者との面談を通して、授業設計や評価の視点の変化を捉えるものである。

## 2. ルーブリック評価

### 2.1 ルーブリックとは

ルーブリックとは、『成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表。』（文部科学省2016a）である。田中（2008a）は『ルーブリックは、評定尺度とその内容を記述する指標から成り立っていて、「評価指針」と訳される。この評価指針は学習課題に対する子どもたちの認識活動の質的な転換点を基準として段階的に設定されていて、指導と学習にとって具体的な到達点の確認と次のステップへの指針となる』と述べ、パフォーマンス課題の評価のための有力なツールとなりうることを示した。近年大学のみならず、初等中等教育においてもアクティブラーニングが注目されているが、パフォーマンス課題を評価するのに、従来の知識や技能の確認のための穴埋め問題は適さない。細やかな行動目標を設定し、その達成状況を何段階かの具体的な指標をもって判断することが重要である。田中（2008b）はルーブリックが真正の評価であることの信頼性の根拠として比較可能性を規定した。比較可能性とは『評価者間で評価基準が共通に理解され、評価対象であるパフォーマンスを同じルーブリック（評価指標）によって公平に評価することで、評価の一貫性が確保されているかどうかを検討する概念』としている。

### 2.2 ルーブリック作成における先行事例

パフォーマンスを評価するルーブリックはその性格上、適応する教科等や場面によって、その記述様式や粒度は違ってくる。

藤田ら（2017）は、小中高等学校の図画工作・美術における鑑賞学習について、「鑑賞学習共通ルーブリック」を作成している。「(A)見方・感じ方」「(B)作品の主題」「(C)造形要素とその効果」「(D)作品にまつわる知識」「(E)生き方」の5観点を、「関心をもつ」「指摘する」「説明する」「批評する」の4段階で記述した。このレベルについては『どのレベルもバランスよく設定するための指針である。さらに、絶対的な基準となるものではなく、これを指標としながら指導者がカスタマイズしていくことが望まれる』と述べている。また、実際の授業においては、この共通ルーブリックをもとに、「題材ルーブリック」を作成し、それぞれの授業で取り扱う題材ごとのより具体的な目標とする観点とレベルを設定し、授業展開を構想する段階的な手順の必要性を指摘する。そして、指導者が「題材ルーブリック」を作成するためには、『指導者の経験や実践的指導力が相当に求められる』ことを指摘している。

内山・伊藤（2017）は、信頼性のあるルーブリックを作成し、継続してルーブリックのアセスメント機能を授業設計に活かすために、次の4つを指摘する。『①ルーブリック作成の目的を明確にする。総括的アセスメントとして実施するか、形成的アセスメントとして実施するか。②評価を行う形態を検討する。③当該の学習活動を評価する価値があるかを吟味する。ルーブリック活用による教師の負担感・多忙感の緩和。④対象の生徒にとって適切か、他者の視点から確認する。』その上で、ルーブリックなどの新たなツールは、『1年間の教科指導という視座を持って提示することが望ましい』と述べている。

田代（2011）は、『詳細なルーブリックの検討を行うほど、忙しい現場の実践には向かなくなる』と指摘し、ルーブリックの基準を簡便化して設定することを推奨している。

そこで、本研究においては、中学校の全ての教科の授業における形成的評価を目的としたルーブリックに焦点を当てる。1年間の全教科、全単元・題材に

ついでにルーブリックの作成を通して、ルーブリックの作成と活用を学校現場で根付かせるための方策について検討する。

これにより、普通の中学校での継続的な取り組みに必要な条件を見だし、全ての教科でのルーブリックに基づく評価を可能とすることができる。

### 2.3 ルーブリックと授業力の育成の関連

内藤(2004)は、ルーブリック作成の意義に『主観や印象で評価されがちな態度や技能がより客観的に評価できるようになる』と述べ、『教員の授業構成力を高める』ことを指摘している。

山口(2013)はルーブリック作成の問題点として、未熟な教師や、当該単位に関しての研究が不十分な教師では、『「量的」な側面にのみ着目し』『相対評価

の問題を脱するために目標に準拠した評価をうたっていないが、相対評価の持つ問題点を相変わらず脱していない』危険性があることを指摘する。ルーブリック作成を通して、『「量的」な見方を脱して、「質的」に、思考力や判断力などの高次の目標の達成状況を「みとる』』視点を得ることができることを指摘する。

## 3 研究方法

### 3.1 働き方改革に沿ったルーブリックの作成

教員の働き方改革が推進され、仕事量の削減が課題となっている中、負荷が増えることは日々の実践に位置づけることは難しい。小中高等学校では翌週または翌々週までの授業の指導計画を立てるのに「週ごとの指導計画(以下週案と称する)」を作成す

3年男子 保健体育科 ( )

10月7日(月)～10月11日(金)

単元・題材： バレーボール

	学習活動	A：十分に満足	B：一定の定着	C：状況及び手だて
知識・技能	フロッターサービス	フロッターサービスがコート奥の方に決められる。	フロッターサービスが決められる。	フロッターサービスが決められない。
思考・判断・表現	フロッターサービス	教えられた知識を生かしながら取り組み、仲間に対してのアドバイスが適切である。	教えられた知識を生かしながら取り組める。	教えられた知識を生かして取り組めない。
主体的に学習に取り組む態度	フロッターサービス ゲーム	意欲的に練習に参加して、安全に留意して取り組める。	練習に参加して、安全に留意して取り組める。	練習に参加できない。安全に留意して取り組めない。 個別指導

図1-1 週ごとのルーブリック書式(保健体育)

## 単元・題材： オセアニア

	学習活動	A：十分に満足	B：一定の定着	C：状況及び手だて
知識・技能	オセアニア州の位置や山脈、川などの地図的知識を身につけている。	オセアニア州の自然環境の問を、資料等を活用して、自力で答えることができる。	オセアニア州の地図中の空欄を、地図帳等を活用し、他の人と協力して埋めることができる。	答えられていない。 →個別支援
	オーストラリアの輸出品目の変化を資料から読み取ることができる。	農業中心の輸出品目から、鉱産資源の輸出品目中心に変化したことが読み取れ、品目が具体的に理解できている。	輸出品目が変わったことが読み取れている。	論述できない。 →個別支援
思考・判断・表現	オセアニア州（オーストラリア）の歴史と社会の変化について、説明することができる。	オセアニア州の歴史について、イギリスの(流刑地)植民地→他地域からの移民の流入→白豪主義→多文化社会という流れがおさえられている。	イギリスの植民地→白豪主義→多文化社会 という流れがおさえられている。	論述できない。 →資料を確認させる。
	オーストラリアの貿易相手先が変化したことを、背景を踏まえて説明することができる。	ヨーロッパからアジアへの結びつきが変わったことを、歴史的な背景や地理的な位置に注目して論述することができる。	ヨーロッパからアジアへの結びつきが変わったことを論述できている。	→教科書、資料集の該当ページを確認させる
主体的に学習に取り組む態度	オセアニア州に興味をもち、オセアニア州の白地図を活用し、主題図を作っている。	授業を超えて国や都市名について農業分布・降水量などの主題図を作ることができる。	授業で扱った国や都市名について農業分布・降水量などの主題図を作ることができる。	→白地図を活用するよう促す。

図1-2 週ごとのルーブリック書式(社会)

る。学校教育法で定められた校長の校務に教育課程の管理があり、校長は日々の授業の進捗や目標設定、教材教具について把握する義務と権限がある。これに対し、各教諭は「週案」で次の週の授業の目標等を報告することは必須となっている。

そこで、この「週案」の代わりに、授業の目標設定を記したルーブリックを利用することで、きめ細かな学習指導体制を目指しつつ、教員の職務の増加にならないよう配慮した。指導と評価の一体化を狙ったものとなった。

B区立M中学校において、令和元年度、「週ごとのルーブリック」の作成を、一年間を通し、全教科、全学年で実施した。

基本の書式〔図1〕をもとに、翌週の授業について学習活動と目標を設定する。この目標に対し、達成度として「A:十分に満足」「B:一定の定着」「C:状況及び手だて」の欄を作成し、達成状況を生徒の行動で表現し記述した。

これを毎週管理職が確認したうえで授業に臨むようにした。こうして作られたルーブリックを基に(P)、次週の授業を行い(D)、その授業を振り返り(C)、次の授業に結びつける(A)というPDCAサイクルを意識するよう教員に求めた。1年間をかけてルーブリックを作成することで、全教科、全単元・題材を対象としながらも、平常の業務に組み込むことが可能だった。

### 3.2 実践した教員へのアンケート調査

一方、事後の状況を客観的に把握し、定量的な資料を補足するために、アンケートを実施した。

令和2年度の夏期休業中を利用して、先述のルーブリック作成の実践に関わった当該校の教員15名にアンケートを依頼した。Google Formsを利用し、webから入力してもらった。(有効回答14件:回収率93.3%)

### 3.3 ルーブリックの内容の分析

作成されたルーブリックはページ数にして604ページにのぼる。内訳は以下の通りである。国語(99)、社会(63)、数学(80)、理科(47)、英語(44)、音楽(94)、美術(97)、保健体育(68)、技術(22)。なお、

家庭科については非常勤講師のみで従前の「週ごとの指導計画」で対応したため、ルーブリックは作成していない。

この作成されたルーブリックについて、導入期、運用期に分けて、使われることばや評価基準の評語について分析を試みた。

また、教科ごとの特性、教職経験による特性の視点で分析した。

筆者は当時、当該実践校の校長の立場にあり、まさに現場で実践する教師とともに日々の問題に取り組んできた。そのリアルな現場を理解するためにエスノグラフィー(ethnography)的アプローチを選択した。

なお本研究は、本学研究倫理審査委員会の審査(「研倫審・2020-10号」)を経て実施した。

### 3.4 聞き取り調査

一部の教員に対しては、学校訪問の際(2020年10月)に聞き取り調査を行った。アンケートの内容に関する補足と、ルーブリック作成の取り組みについて、個別に面談した。



## 4 実践の経過と分析

### 4.1 取り組み初期段階の混乱

#### ①教職経験25年以上のベテラン

これまで研究授業などを何度も経験している教員ほど、従来の指導案で使ってきた観点別の目標の表現に引っぱられる傾向が見られた。

A教諭は、A評価に「作者のものの見方や考え方について検討し、評価できる」、B評価に「どのような結びつきがあるか考えることができる」と記している。この教諭には、何をもって「評価できる」と判断するのか、何ができていたら「考えている」と見取ることができるのか、目に見える子どもの行動ベースで表現して欲しいと伝えた。

その後、俳句の指導の場面ではA評価に「自分の表現に取り入れたい表現技法を記すことができる」、B評価に「優れた表現の仕方を見つけて抜き出すことができる」というように、学習者の行動に基づいた表記に変わっていった。

B教諭は「意欲的に」「積極的に」など情意面の表現が多く見られた。これが後期になると「技のポイントを考え」「手や足の位置を正しく」などの表現が増えていった。また「正確に」といった表現においても「足の使い方」「ボールの当てる位置」など判断基準が示されている。

#### ②教職歴3年以下の新人

C教諭(新任)はA評価に「具体例を4つ以上挙げながら」、B評価に「具体例を2つ以上挙げ」など、量的な差異に頼った基準が多く見られた。そこで、質的な差に注目するよう指摘した。その後、A評価に「自分の言葉で考察できる」、B評価に「自分でまとめることができる」など、質的变化に着目して表すものが増えた。さらに「考察できる」を具体的な行動で示すよう助言した。

D教諭(2年目)は、「～を理解している」「～しようと努める」「～を考える」など、生徒の内面での変化の表現に留まり、具体的な行動で表現することができない。また、A評価とB評価の違いを明確に示すことができずにいた。具体場面を想定して、何ができて何が目標の達成となるのかを確認していった。後期におい

ては「ずれないようにグラフをかく」「比例定数を変えたときのグラフの特徴を予想する」「異なる点を挙げる」など評価の視点が定まってきたことが分かる。

#### ③全体として

取り組み初期においては、具体的な生徒の行動として判断しにくいもの「(ノートに)まとめる」「理解する」「考える」等の表現が目立つ。一つずつ指摘し、変化を促した。

### 4.2 運用期における評語の特性

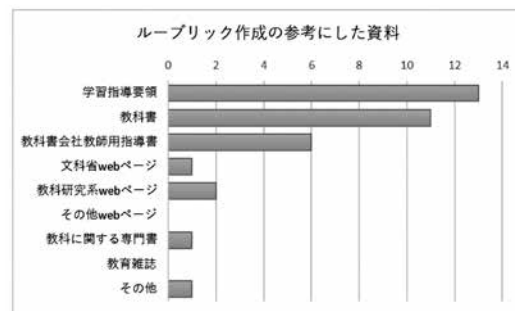
2学期に入りルーブリックの作成に慣れてくると、実践している教員たちは、これまでの授業形態のままでは特に「主体的に学習に取り組む態度」の評価が難しいことが分かってきた。そこで「発表する」「説明する」「観察から～に気づく」「話し合う」などの表現が増え、授業そのものの構成に変化が見られるようになる。

また、座学であっても、「いろいろな問題に取り組む」「友達に教える」など、生徒の能動的な活動を見取るようになってきている。あるいは「当時の民衆の立場に立ったものであるか」といった、多方面の資料を基にして考察することを求める活動を評価しようとしている。

## 5 職員アンケートの結果と分析

### 5.1 参考にした資料

学習指導要領(14人中13人)や教科書(14人中11人)はほとんどの教員が参考にしてている。教科書会社が発行する教師用指導書も約4割が参考にしてている。また、教科に関するwebページや専門書を参考にするのは、後に行った一部対象者への聞き取り調査の結果、授業力の高い教師に見られた傾向だった。



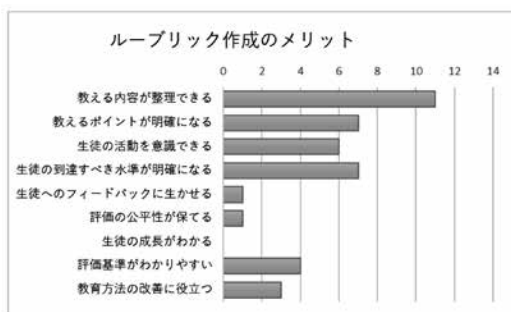
(図3) アンケート結果1：参考にした資料

## 5.2 ルーブリック作成のメリット

教える内容が整理できる、ポイントが明確になる、生徒の活動が意識できる、生徒の到達すべき水準が明確になる、など指導内容や評価基準が明らかになる点を挙げる者が多い。

一方、生徒の成長が分かる、生徒へのフィードバックに生かせるなどが低いのは、今回の取り組みが指導用のルーブリックであり、生徒に提示して共有する活動まで求めているなかったためである。

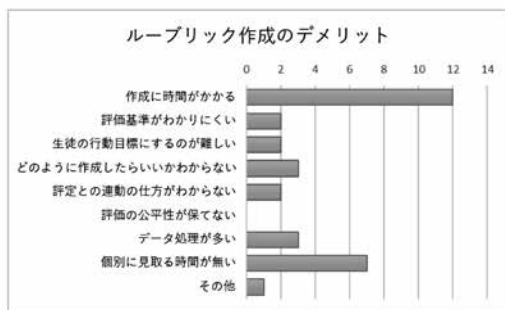
この活動を継続する中で、評価基準を生徒と共有する取り組みを行ったときには、変化が期待できる。



(図4) アンケート結果2：ルーブリック作成のメリット

## 5.3 ルーブリック作成のデメリット

作成に時間がかかる、個別に見取る時間が無いなど時間に関する項目が多い。

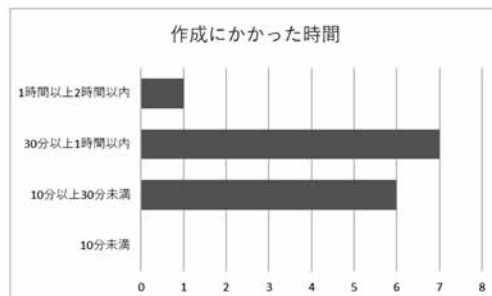


(図5) アンケート結果3：ルーブリック作成のデメリット

## 5.4 ルーブリック作成にかかる時間

毎週末に提出するルーブリックは、翌週に予定された「次の授業」の評価計画である。そのため、各教員には授業のイメージが明確にある状態である。

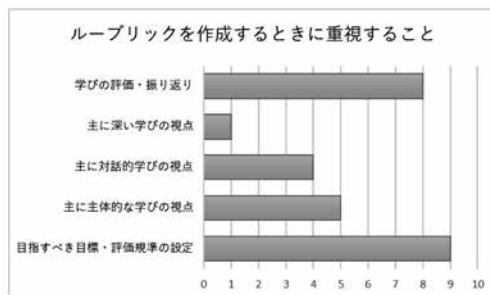
目標設定や評価項目について作成しやすかったものといえる。ほとんどは30分未満(6人)、1時間以内(7人)で作成している。



(図6) アンケート結果4：ルーブリック作成にかかった時間

## 5.5 ルーブリック作成時に重視すること

「学びの評価・振り返り」(57%)、「目指すべき目標・評価規準の設定」(64%)を半数以上の教員が選んでいる。この傾向は埼玉県戸田市での実践結果(戸ヶ崎2019)とも合致し、子供の学力を伸ばす教師に見られる特徴として紹介されている。今回の実践者たちが、真摯に取り組んだ証左のひとつとして挙げておきたい。



(図7) アンケート結果5：ルーブリック作成時に重視すること

## 6 ルーブリックの内容分析

### 6.1 各評価段階における評語の傾向

#### ① A評価に見られる評語

「知識・技能」観点については、次のように分類した。学習者がその事項をできたか、できないかの判断がしやすい観点であるが、精緻性や量的な部分に比重



が大きい傾向がある。

- 独自性  
「自分の意見」「自分の言葉で」「工夫して」
- 精緻性  
「正確に」「十分に」「美しく」「ていねいに」「バランス良く」「修得する」
- 量的優位性  
「十分満足」「余裕をもって」「多面的に」「多角的に」「多様な」
- 資料活用  
「根拠を示して」

一方、「思考・判断・表現」観点に現れる評語は、次のように分類した。

- 独自性  
「自分の考え」「創意工夫して」
- 精緻性  
「簡潔に」「手際よく」
- 汎用性  
他の領域に生かす」「～を生かす」
- 協調性  
「友達に説明」「意見を交流」「他と協力して」
- メタ認知  
「適切な方法」「全体構成」

「主体的に学習に取り組む態度」の観点では、以下のように分類した。この観点の評価基準を作るのが最も難しいという声が多く聞かれた。その現れとして、情意面を評価する評語が多くあるが、この部分については、行動として見取ることがしにくい表現も多く、今後の改訂が必要なところである。また、「拳手の回数」「宿題の提出回数」「片付けを進んで行う」など生活指導上の授業態度を入れている例が若干見られる。これらはその都度修正を求め、学習評価としての観度の性格を伝えていった。

- 汎用性  
「教科書以外の写真から」「読み比べて」「他の領域に生かす」「比較する」
- 協調性  
「相手を尊重して」

- 情意面  
「積極的に」「意欲的に」
- メタ認知  
「修正する」

## ②B評価に見られる評語

B評価の評価基準に使われる評語は、目標に対する基本的な行動ができるものである。よく現れる評語を次のように分類した。

- 目標に対する方向性  
「概ね」「きちんと」「大まかに」
- 限定的成功  
「～している」「～はできる」「どちらか」
- 初歩的取組  
「確認して」「1つずつ」
- 受動的取組  
「～を見ながら」「～を利用し」

## ②B評価からA評価へのステップ

A評価の評語とB評価の評語を対にしてみると、求めるステップが見えてくる。学習者の身につけていくべきベクトルがわかる。

- 「偏っている」から「美しく」
- 「自分ができる」から「説明できる」
- 「やろうとする」から「できる」
- 「できる」から「伝える」

- 自分が「できる」から友達作品を「評価できる」
- 単に「まとめる」から「相手に効果的に伝わるように」
- B評価の基準に「～を加えて」

単数から複数へ（量的な変化）

単に「説明できる」から「具体的な根拠を示して説明できる」へ

こうしてみると、学習者の発達段階によって、求める行動がA評価に値するか、B評価となるかは違っている。簡易なものから高難度のものへ並べてみると次のようになる。

初期の知らない状態から、知っている、やってみる、理解する、身につけている、説明できると変化していく傾向が読み取れる。

## 6.2 内容に対する助言と記述の変容

「気づくことができる」「考えている」という表現を使った記述は実践初期段階では頻出した。これに対し、「生徒が気づいたか、考えたかほどのような行動によって判断しますか」と指摘した。外から観察できる行動で表して記述することを促した。すると「ワークシートに記入する」「解説を読む」「根拠に話し合う」など生徒の行動で表現されるものが増えてくる。

また、教職経験の浅い教員の傾向として「主体的に学習に取り組む態度」の評価に発言の回数を見る記述が出てくる。一方「緯度と経度を使って表すことができる」といった具体的場面を想定する表現もある。この表現の揺れは、評価観が定まっていないことから現れやすい。生徒のどの行動から理解や、態度を測ろうとするのか、経験が増すにつれて定まってくる。

## 7 まとめと考察

### 7.1 中学校全教科，全単元のルーブリック

新学習指導要領（平成29年告示）に基づく評価・評定が小学校では今年度から、中学校では来年度から実施される中、これまでの授業形態を見直す必要に迫られ、それに伴って評価も変化していくことになる。たった一校での実践ではあるが、全教科、全単元・題材においてルーブリックを作成できたことは大きな成果である。このルーブリックをもとに、ブラッシュアップしていくことで、主体的、対話的で深い学びの実現に向けて進んでいく道筋ができる。

### 7.2 働き方改革を見通した実践

学校現場は忙しい。文部科学省(2016b)によれば、中学校教員の約6割が「過労死ライン」に達する週20時間以上の残業をしていた。それでも子供たちのためにと時間をやりくりしている現場教師集団である。働き方改革が叫ばれる中、これ以上の負荷を増やすことなくできる実践を示さなくてはならない。特殊な環境ではなく、市井の公立中学校で実践した意義は大きい。

週ごとのルーブリックは、次の授業のための指導

計画であり、目標設定であるから、生徒の活動がイメージしやすい。週に1時間程度、授業のことを真剣に考える時間をもつことは、教師の授業観、評価観を鍛え、持続的な実践となった。

### 7.3 実技教科の評価基準の特性

そもそも実技教科は、これまでも生徒の活動中心に授業が設計されていることが多く、主体的、対話的な学びはイメージしやすい。

生徒同士のインタラクティブな関わりを授業に取り入れ、その評価をするような記述が目立つ。「友達の作品の良さを説明する」「的確なアドバイスをする」「前向きな声かけをする」など、グループ等の関わりを大切にしている。

生徒がそれぞれの活動を行ったとき、その全てを同時に観察することは難しい。補助的に生徒の活動を把握するための工夫も見られる。「学習カードの記入」から、生徒自身による「課題発見」や「改善のポイント」への気づきなどを読み取ろうとしている。

保健体育科教員を目指す者が多い本学学生にとって、参考になる事例が確認できる。

### 7.4 課題

#### ①学習者への提示

今回作成したルーブリックは指導者の視点で書かれており、学習者と共有できるレベルまでの完成度のものは求めている。主体的な学習を求める上で、学習者が、ゴールとなる学習目標を理解し、そのゴールに向けての指標となるルーブリックを意識することの意義は大きい。

学習者と共有できるレベルに言葉を厳選したルーブリックの作成が急がれる。

#### ②客観性の保障

実際の授業にかけて検証を重ね、評価基準の客観性を高めるように更新していくことが重要である。本実践は1年間のものであったが、2年目以降にブラッシュアップしていくことで、より評価の精度が上がる事が期待できる。

単一校では一人教科のことも多い。地域の学校同

士で共同し、評価基準について交流する機会を作ること、客観性を高めていけると期待できる。

育学部紀要 人文・社会科学編 第62巻pp157-168

### ③共有化

他の実践者の視点で作られたルーブリックも参考にできれば、客観性の制度も上がり、作成の負荷も軽減できる。

- ・地域でルーブリックを共有する。
- ・web等でデータベース化する。
- ・行政による研修を行う。

など、共有化の仕組みづくりに現在取り組んでいる。

### 【参考文献】

藤田雅也, 松岡宏明, 赤城里香子, 泉谷淑夫, 大橋功, 萱のり子, 新関伸也 (2017) : 鑑賞学習ルーブリックの作成とその活用に関する一考察, 美術教育 No.301 pp24-30

文部科学省 (2016a) : 学習評価に関する資料, 総則・評価特別部会 資料6-2,p28

文部科学省 (2016b) : 教員勤務実態調査 (2016年度)

文部科学省 (2018) : 平成29年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について, [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/senkou/1401021.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1401021.htm)

内藤雅人 (2004) : ルーブリックを生かした形成的評価とその活用に関する研究, 山梨県総合教育センター 研究紀要 概論, p4

田中耕治 (2008a) : 「教育評価」, 岩波書店, p159

田中耕治 (2008b) : 学力調査と教育評価研究, 教育学研究 第75巻第2号 pp146-156

田代直幸 (2011) : 理科におけるパフォーマンス課題とは, 理科の教育 Vol.60 pp591-594

戸ヶ崎勤 (2019) : 戸田市の学力向上策等について, 中央教育審議会第4回教育課程部会資料

東京都教育施策大綱 (2017)

内山智枝子, 伊藤稔 (2017) : 「ルーブリックのアセスメント機能を授業設計に活かすためには」, 科学教育研究 Vol.42No.1 pp37-49

山口陽弘 (2013) : 教育評価におけるルーブリック作成のためのいくつかのヒントの提案, 群馬大学教